

## 新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 久保 博之

平成十九年を迎え、謹んでお祝辞を申し上げます。旧年中は当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の研修旅行などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も各方面より注目を浴び、昨年度は県市内外よりの来訪者は約三千六百人を数えました。また、平成元年以来発刊してまいりました、特集「ながさきの空」も本年度第十八集となります。本年も「長崎学」を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の発展に寄与したいと考えておりますので、引き続きご支援下さいますようお願い申し上げます。

平成十九年正月

## 亥年を迎えて

越中 哲也

今年を亥年というのは、中国の暦法（旧暦）十二支により、そう呼んでいる。中国の暦法では十二支のみでなく、それに十干も加えて其の年の暦



小波魚青筆 双鶴之図  
魚青は明治・大正の間長山に於ける四條派の  
画人として有名であった（越中文庫蔵）

に十二支の文字を動物を配したのが十二支と動物の組み合わせの始とすると記してあった。然し「子」の文字がどうして「ネズミ」になったのか、丑がどうして牛になったのか、という事については記されていない。亥の字も同様、何故亥が「猪」になったか不明であると言う。



然し猪は俗字で本来は猪と書くと言明してある。そして本来の文字は上部に示すように、上に頭があり四足と尾があるので猪の型を写して文字を造ったことがわかる。

中国の古典ではイノシシとブタは区別されていなかった。我が国の古代にもブタの言葉はなかった。一六〇三年長崎のコレジオで出版された「日ボ辞書」には「Buta Lyeno inoxixi（きやどべかどる字集）家の猪と記してあるので「ブタ」の言葉は室町時代すでに使用されたのである。関根真隆先生の「奈良朝食生活の研究」には次のような事が記してあった。

常陸国風土記の中に「山野に椎樗榿生、粟生、鹿猪住之 凡山海珍味…」。續記「詔、和買幾内百姓 私畜猪卅頭 放於山野 令遂其命（天平四年七月丁未條）」

これによって当時、農家では猪を飼っていたのであることが知られる。その猪を野に放った事については次の勅がある。  
續日本紀 宝字二年七月甲戌條 勅 比来皇太后寢膳不安…天下諸国に今年十二月三十日まで利生を禁断せしめ又以て猪鹿の類 進御すること得ず

また、考古学の調査報告によると「猪の食用は縄文・弥生時代を通じて盛んであった。福岡県城越遺跡では「他の獣骨に比べてイノシシが最も多い」とある。登呂遺跡の報告書には次のように記してある。  
登呂では、野性のイノシシの子を飼いならわしたのではないだろうか…とある。

これらの報告書を総合して猪の食習は縄文弥生以来、奈良時代にも家で猪の子を食用として飼育されていたと考えられる。  
さて、私は佛像の中にも、何か猪があったと考えて佛像史をみていたら、薬師如来を護衛する十二人の大将があり「其の大将を十二神將とよ

年を述べるので、今年の十干を加えた年号の呼び名は「丁亥の年」となる。その十干と言うのは「甲・乙・丙・丁…」の十字である。そして十干十二支ともに季節に従って万物が成長してゆく状態を物語っているものであると説明されている。然し、その起原については中国においても、あまり判然としないと説明されている。

その中国の暦法が我が国に伝えられたのは、中国より我が国に文字が朝鮮半島経由で伝えられた頃とされており、明日香時代の宮中行事の記録の中には既に干支が記されているので、日韓交渉が開始された古墳時代より之の中国の暦法が我が国でも使用されていたと考えられている。

そこで先ず十干の事より考えてみると、干は幹であり、支は枝であると言う。そして、十干は多分、五本の手足の指を元とし、それに人類の構成の原点として「木・火・土・金・水」の考えを加え、更に其の一つ一つを兄弟に二分し、木兄、木弟、火兄、火弟…としたと言う。今年の十干は「丁」であり「ヒノト」の年と名づけている。「甲」の年は先ず芽ばえ、「乙」は万物軋々然と「なり」「丙は万物陌然となり」「丁は万物丁壮となり」しげれる様をあらわすと説明してある。

次に十二支の解説を読むと「子は滋と音に通じ 萬物しげり初む芽ばえ也」、「丑は紐也。まだヒモでしぼらねば十分に伸びない」…「亥はガイ」と読み十二支の最後で「子より育った万物が実って核となり次代に其の種を残す」とあった。

すると十干・十二支も、最初は一年の十二ヶ月をあらわしていたが、時代と共に変化し、十干、十二支が時刻になり、方向になり、前漢初期（B.C.1頃より千支が年号にも使用されるようになったと記してある。

中国の「事前起原」には、伝説であるが「黄帝帝が月を中心にして天体十二辰に名づけたが、その時、一ツ一ツに動物を配し、その年ごとすると十干・十二支も、最初は一年の十二ヶ月をあらわしていたが、時代と共に変化し、十干、十二支が時刻になり、方向になり、前漢初期（B.C.1頃より千支が年号にも使用されるようになったと記してある。中国の「事前起原」には、伝説であるが「黄帝帝が月を中心にして天体十二辰に名づけたが、その時、一ツ一ツに動物を配し、その年ごとすると十干・十二支も、最初は一年の十二ヶ月をあらわしていたが、時代と共に変化し、十干、十二支が時刻になり、方向になり、前漢初期（B.C.1頃より千支が年号にも使用されるようになったと記してある。

長崎県下の猪の話では、私達は先ず対馬藩の陶山納菴の事を考える。納菴の評論については「新対馬島誌」四、対馬聖人の部（P.三一九）に詳しい。納菴は「天然資源の乏しい対馬には野猪の害は特に甚だしかった」ので全島の猪を全て排除する事にした。その構想を記したものととして「猪鹿追話覚書」がのこっている。そして元禄十三年（一七〇〇）十月の冬、対馬の北端豊崎より着手し年々に南に下り、宝永六年（一七〇九）春南端豆殿に至って終わっている。其の猪鹿の数、八万頭であったと記してある。然し、之れに対して対馬の知名の土が「一国の猪を駆りつくして之をたおす何と凶暴ぞや」という人もあった。

江戸時代における猪の害は、対馬のみでなく大村藩、とくに西彼杵半島では甚だしかった。大村藩の記録「九葉実録」の享保七年六月二十二日の條に「瀬戸より中浦に至るまで石砦を築き鹿猪を防ぎ田園を守る」とあり。西海町中浦木場には当時の猪垣の基点の石垣があり長崎県有形民俗文化財に指定されている。そして其の猪垣には「享保七年（一七二二）壬寅年」の文字が刻まれている。

猪を取り扱った美術品は実に少ない。長崎市内では毎年ご紹介してきたが、長崎市桶屋町所蔵の十二支刺繍傘の幕（長崎市文化財）には「親子猪」の作品があり、長崎三菱造船所占勝閣所蔵の有名な山本芳翠の十二支図（油彩）には前述の十二神將金毘羅大将を運慶が今仕上げようと苦心している模様が描かれている。

（長崎歴史文化協会理事長）

